

編集室

* 何か編集関係で面白い話はないかなと思案していて、個人的なことであるが数年前に怪談があったことを思い出した。私の研究室の学生が自分の論文に書く自分の名前を間違えたのだ。

* それは国際会議の論文だった。論文内容に関しては、何度か添削を繰り返していた。最終版が出来上がったのは、原稿提出締切りの30分ほど前であった。時間もないので、私は急いでチェックした。まず、私が添削したとおりに内容が修正されているかチェックした。次に、論文題目、私の氏名、所属、所在地をチェックした。実は、論文題目、所属、所在地を間違える学生は結構多い。一番重要なところであるが、一番の盲点でもある。しかし、まさか学生が自分の名前を間違えているとは思わなかった。

* その後、採録通知が来た。また、しばらくして国際会議のプログラムがホームページに掲載された。それを見て学生の名前が間違っていることに気が付いた。当然プログラムの誤植だと思い、国際会議のプログラム委員会に訂正するように連絡しようと思った。その前に念のため原稿を見てみた。何と学生の名前が間違っている。姓は合っているが、名が全然違う。タイプミスなどではない。

* そこで考えた。これは姓名判断のせいに違いない。普段使っている名前は、姓名判断で付けてもらった通称で、論文には本名を書いたのだろう。つまり、国際会議は海外で開かれるので、論文の氏名がパスポートの氏名と異なっているとまずいことがあるかもしれないと考えて、本名を書いたのだろうと思った。

* ところが、学生本人に聞くと、普段使っている名前が本名で、論文の名前が間違いだという。無意識のうちに間違った名前を書いてしまったらしい。

* 本人は、自分の講演の際に正誤表を配りたいと言ったが、名前を間違えた正誤表など恥ずかしくて配れるわけがない。また、プロシーディングスはCD-ROMなので、紙の正誤表は捨てられるだけである。それ以前の問題として、研究倫理上、著者名の変更は厳禁である。

* どうにも理解できない出来事である。その学生の御先祖様に研究者がいて、自分ができなかった国際会議発表の夢を子孫に託して自分の名前を書かせたのではないだろうか。最近は皆頻繁に海外出張をするが、昔は海外出張をして国際会議で発表することは大変なことであった。

* この一件以来、論文題目、著者全員の氏名、所属、所在地を何度も何度も入念にチェックするようになった。最近の学生は自分の所属を正しく書けない者が多い。大学の組織再編で名称がコロコロ変わるのも一因であろうが、何か根本的な原因があるのかもしれない。超難関某私立中学校では、1年生1学期の国語の中間テストで、その学校の名称を書かせる問題を毎年出題しているそうである。最近の子供は、記憶力が悪いわけでもないのに、自分に関係する固有名詞を正しく記憶できないらしい。この話を聞くと、例の一件は怪談などではなく、最近の日本人の記憶構造変化という、もっと大変なことのようにも思える。

(編集理事 田中良明)